沖縄県立博物館紀要　第23号　111—140,　1997

沖縄県立博物館草創期に関するノート

萩尾　俊章・多良間利絵子
（沖縄県立博物館・沖縄県立博物館）

Research Notes on the Beginning of Okinawa Prefectural Museum

Toshiaki HAGIO and Rieko TARAMA
(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

沖縄県立博物館は1996年（平成8年）4月24日に創立50周年の記念すべき日を迎えた。戦後の博物館創設は、沖縄戦によって破壊、散逸した文化財を、県民の手によって収集することから始まった。終戦直後に人々の生活が復興するのと並行して進められた点は堂目に値すべきことでもある。

沖縄県立博物館50周年事業の一環として『沖縄県立博物館50年史』（以下、50年史と略す）が1996年12月6日に刊行された。50年史編集委員会により様々な意見が提起され、内容は充実したものとなった。ただ、50年史の紙幅の制限、また資料の調査と編集期間が比較的短かったことなど、編集が終わった段階で資料が十分に取り込めなかったり、補足調査が不十分なところや解説ができなかったり、あるいは一部に誤植があったりもした。

ここでは、50年史では十分に収録できなかった沖縄県立博物館草創期に関する資料を補足的に記録しておきたい。というのも博物館の草創期にあたる東恩納博物館、沖縄郷土博物館については、記録らしき資料は現在皆無に等しい。当博物館には『博物館沿革史』という永久保存の公文書綴が保管されている。この文書は主として首里の郷土博物館や首里博物館にかかわる書類で、東恩納博物館に関するものは皆無に等しい。また、初期の首里市立郷土博物館（1954年以前）には活動記録や日誌的なものはない。したがって、博物館草創期の活動状況や職員の構成などは関係者への聞き取りなくては把握できないのが現状である。しかも、当時の職員や関係者は多くが物故者かあるいは高齢者になりつつあり、当時の子細な状況も聞き取りが難しくなりつつある。当博物館にかかわった職員として、ここでなるべく多くの情報を掲載し、後顧の資料となることを期して記述した。

内容については適宜、萩尾俊章と多良間利絵子が分担して執筆した。

1　設立草創期の記録

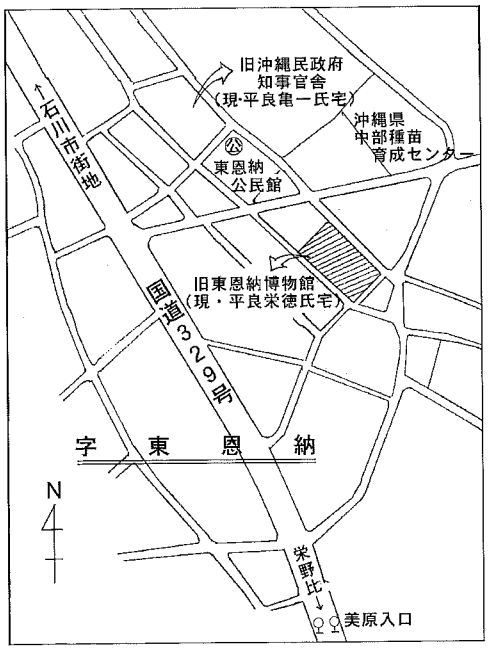
（1）石川市の沖縄陳列館・東恩納博物館の時代

沖縄県立博物館の創設は周知のように石川市に開設された沖縄陳列館、のちの東恩納博物館を嚆矢とする。東恩納博物館は米国海軍軍政府の創設になるものである。また、少し遅れて開館した首里の沖縄郷土博物館は市の文化部により開設された点で対照的なスタートであった。

沖縄陳列館は石川市字東恩納33番地の平良栄徳氏の住宅を利用して創設された。平良氏の家屋敷は戦後間もない頃から7年間にわたり博物館に使用された。現在、家屋敷は博物館撤収後ほぼそのままの状態であり、井戸や庭園の一部が残っている。

沖縄県教育委員会編の『沖縄県史料戦後１　沖縄諮詢会記録』（1986年）には、草創期の博物館（東恩納博物館）に関する記録がみえる。創設時の状況を把握する意味で、博物館に関する部分を摘記しておきたい。

1945年9月26日の諮詢会協議会における市行政機構の協議事項では、各部に属する課や職務内容が話し合われている。軍政府からは「仏像は教育部に」という一言がでている。これは東恩納博物館に展示されていた金武の観音堂の仏像のことであろうか。それとも教育部に所管された仏像が別にあったのか、その点は不明である。



旧東恩納博物館位置図

現在の平良栄徳氏の住宅
（旧東恩納博物館）

1945年9月27日の市長会における協議事項では教育部長の山城篤男委員から「中央に文教部と文化部とあり。文教部は学校、図書館、博物館」とあり、博物館は文教部の管轄であった。

琉球政府編の『琉球史料　第１０集』において、終戦直後の文化部の変遷に関する項目がある。文化部は1945年8月20日の諮詢会の創設とともに設立された。軍政府文化部長はハンナ少佐、民政府文化部長は当山正堅であった。博物館は文化部の中に博物館課が置かれていた。「1945年ハンナ文教局部長のもとに博物館が東恩納に設立され、沖縄の美術工芸品を収集陳列するとともに、各地区の史蹟名勝の調査保存に務め、英文『沖縄歴史』並に『沖縄文化写真』を印刷作成し、博物館参観の都度米軍将兵に有料配布し、沖縄の文化紹介をなし、また美術部員の作による日本画、洋画を通じて沖縄の風物史蹟、名勝その他を紹介した」という。また、文化部の事務分掌として、博物館課は「東恩納ニ於ケル沖縄博物館並ニ其ノ所属建物庭園及陳列物其他凡テ軍政府ノ許可スル沖縄文化展覧会ノ経営維持」と位置づけられた。

文中の英文「沖縄歴史」と「沖縄文化写真」は、現在博物館の手元になく、どのようなパンフレットだったのかわからないのは残念である。小規模な博物館だったとはいえ、パンフの作成や絵画展の開催など、ハンナ少佐を中心に、米国軍人への沖縄文化の普及的な試みが行われていた。

1945年11月24日の諮詢会協議会では食糧、文化財などについて話し合われた。総務部長又吉康和委員は「委員長、松岡幹事、護得久、山城、當山の諸委員にお願ひしたいが、崇元寺、玉御殿、ハンタ山の赤木、円覚寺、首里城等の古跡を諮詢会で保存会を設け軍政府に願って保存をして置いたら如何かと思ひますが」と発言したのに対し、山城委員は「ハンナ大尉は古跡の破壊されるのを怖れ金武寺の仏像や首里から鐘を持って来て東恩納の博物館に保存して居る」と回答し、又吉委員は「其場に残されるものは残して置いた方がよいではないでせうか」と反論している。

こうした話し合いはあったものの、放生池石橋のように実質的には現地での保存が難しく、博物館において保管されたものが多い。

1945年12月24日の軍民協議会ではとくに博物館について協議されている。少々長くなるが、東恩納博物館の初期の様子がよくわかるので、そのまま抜粋しておきたい。

軍政府「来週糸数氏の所へ行くが其時持って行って見せたい（絵筆を）。今日沖縄に来ている米兵の印象では首里那覇等の都会地や旧跡がなくて貧弱な所であると云う感じに打たれている居る。故に沖縄の認識を深めるために何かを講じたい。今は軍関係の者

しか居ないが将来は米国の政治家や市民等が来るが彼等の人々に認識を深めなければならない。其方法として二つの案を有って居る。

(1) は教学部（文教部）の建物と博物館を造ったが、其建物や庭を作らしたのは其の一つである。

(2) 博物館と庭は未完成だが之を完成させ、又沖縄の工芸品も加へたい。

博物館が完成した時には其外に沖縄を紹介するものはないから之を以て沖縄の文化の形を整へて昔の文化を認識し又教育して行きたい。庭及建物も不完成とは思ふが沖縄文化を知らすには已むを得ないだろう。博物館に来て米兵が始めて庭や庭内にある池を見て認識を高めつつある。海軍の高級将校が博物館を見たが沖縄文化に対して印象を深めた。之が完成した時は多くの人々に見せたい。米兵としては沖縄の将来について如何にすべきかと云う関心は持って居ない。沖縄の将来について関心を持つ人々は佐官将官以上の高級将校や貴衆両院の人々である。斯る高級将校や貴衆両院等の偉い人々は博物館で長時間ゆっくりとして観察する事は出来ない。故にムーレー大佐の官邸に沖縄の認識を深める方法を講じなければならない。ハナ（HANNA）と私（ワッキンス少佐）が軍政府の付近に沖縄の建物を見出した。柱はマキ、壁、天井等は杉材で造ってあるがあちこち被害があるが之を修理させて居る。庭も建物とバランスの取れるようである。ムーレー大佐の屏風は彼が持帰へるのではないから文化を物語る材料になる。其外指物、編物、提灯の如き類等もやって行きたいから暗示を与へて貰いたい。斯る物は博物館の帳簿に記録して置いて之を米国に持ち帰へるのではない。博物館は主として米兵に観覧させ、ムーレー官邸は高級将校等に紹介したい。仲宗根、又吉、當山の諸委員等は沖縄は食料等も不充分であるのに何で斯ることに力を入れられるだろうと考へられるかも知れない。博物館及ムーレー大佐の邸宅の計画は軍政府の命令でもなく、軍政府でやれと云う事でもない之はハンナ大尉と私（ワッキンス少佐）との考えでやって居るものである。ハナ大尉と私（ワッキンス少佐）は日本及支那の文化の程度も知っている。沖縄の文化の程度も知らしめたい。沖縄の文化も此程度あったものだと知らしめたいのである。

博物館とムーレー大佐官邸と中城城跡はあるが其外にはないものであるか。

又吉委員「首里城の絵を私が所持して居るから他日御覧に入れたい。早稲田大学の田辺氏が首里城及沖縄の民家の有名な家の写真を持って居る。」

仲宗根委員「戦前の沖縄の文化、風俗、生活等を絵画にして博物館に備へたい。」

比嘉委員「日本全国に県と比例して沖縄は国宝指定の多かった所であったから之も付加すると尚沖縄の文化が分かると思ふが。」

軍政府「當山文化部長にやって貰いたい。文化を物語る文化史を設けたい。沖縄の文化

を求める本を調べたい。尚沖縄にないものは日本にでも求めたい。沖縄に関する著書を調べて貰いたい。」
又吉委員「現に調査しつつあります。」

以上、とくに諮詢会の会議録から抜粋したが、ここではハンナ少佐とワトキンス少佐の博物館への思い入れがよく表れている。

博物館の創設に尽力したハンナ少佐は沖縄文化のよき理解者であった。ハンナ少佐は1945年から1946年まで沖縄の米国海軍軍政府教育部長として、灰じんの中から復興していく教育文化の再建に力を注いだ。ハンナ氏は東洋歴史を専攻し、東洋通の文化研究者であった。首里城が破壊されたことを惜しみ、「気の毒だ」ともらしていたという。また、自分自身でジープをはしらせ、各地を廻って瓦のかけら、彫刻の一片に至るまで遺跡や文化財を探し出し、東恩納の博物館を整備した。沖縄文化をこよなく愛し、島袋全発氏の協力と大城皓也氏の装丁で1946年に「ショート　ヒストリー　オブ　オキナワ（Short History of OKINAWA 「沖縄小歴史」）というパンフレットを発行しているが、博物館には当該資料は現存しない。この序文で「沖縄人は現在諸君からみれば戦争に叩かれたみすぼらしい服装でボロ家に住む民族だと思うだろうが、否だ。沖縄人はかつて美しい文化を持っていたのだ」と述べ、沖縄文化への深い愛着の念を披露している。

こうした背景の中で博物館は設立された。東恩納博物館は「博物館は主として米兵に観覧させ、ムーレー官邸は高級将校等に紹介したい」とあるように、ムーレー大佐の官邸も博物館的な展示がおこなわれたと思える記述があり、しかも東恩納博物館とムーレー官邸で、観覧の米人対象者を弁別しようとしていた。ただ、ムーレー官邸の展示内容については現在の資料では明らかではない。

さて、＜ハンナ博士と沖縄＞と題した座談会の内容が新聞に掲載されている。新聞社は不明だが、1955年11月9日から11月15日までの5回にわたる連載記事である。座談会の出席者は山城篤男（文教部長）、城間朝教（文教部員）、島袋俊一（文教学校長）、翁長俊朗（外語学校長）、中山盛茂（文教部員）、比嘉徳太郎（文教部員）、外間政章（外語学校職員）、野崎真一（文教部員）、大城皓也（文教部員）、山元恵一（文教部員）、島袋光裕（文教部員）、大嶺薫（文教部員）の各氏である。（　）の役職は当時の役職である。5回目の連載記事の「戦後沖縄文化の再興をめぐって」という座談会では、大嶺薫氏の談がある。

「ハンナさんが博物館をつくりたいが、やってくれとたのまれたので私も引き受けて一緒につくった」と語る。「大体ハンナさんの考えとしては沖縄の一千年の文化財がこ

とごとく灰じんに帰して全くみる形もなくなっている。これでは南方の非文化民族と何ら変わるところがないのでハンナさんが古文化財を収集して博物館をつくろうというわけで45年の8月から事業に着手した。近づきになった最初の動機は私が尚順男爵邸にあった月見灯ろうや雪見灯ろうを説明、片足のかけたシーサーをセメントで修理して土とカンダバーの葉でぬったところうまく出来たのが私がとくに可愛いがられたはじめである」と語っている。

この点からわかるように、博物館として事業に着手したのが1945年8月であった。また、12月24日の会議で「博物館と庭は未完成だが之を完成させ」とあるように、この時点では博物館としての見学に供せられる状態ではまだなかったことがうかがえる。

当初はハンナ少佐が博物館運営にタッチしたが、民政府移管後は大嶺薫氏の手に委ねられた。その後の職員構成は『沖縄県立博物館50年史』の佐次田トミさんの聞き取り原稿に記されているが、佐次田さんの直接の前任者は石川市伊波在住の仲本美代子さんであったこと、また仲本さんが結婚して渡米したために佐次田さんが後任となったことを、ここで補足しておきたい。

『沖縄県史料　戦後２　沖縄民政府記録１』にも、その後の博物館関係の記事がみえる。1946年10月25日の定例部長会議では、民政府移転後の処理問題とともに、博物館の議事もでている。當山正堅文化部長は「博物館は東恩納に留りたい。首里の博物館も経営することになって居る」と語っている。軍政府が知念に移転するとともに、沖縄民政府も移転を促されたが、博物館はこの時点で石川市東恩納に留まることを希望したことがうかがえる。

1947年2月20日の軍民連絡会議では東恩納博物館の家の所有者について議事がある。志喜屋孝信知事は「東恩納に所有主の分かった家を博物館として使用して居るが之は如何するか。個人の家を公共物に使用してよいか如何か」と述べ、これに対して軍政府は「軍から公共物に使用してよいとあったら使用出来る。所有主が分かったら外に家を作って元の所有主に返してよい。平和会議以前といえども其れが本体である」と回答している。東恩納博物館の建物所有者が平良栄徳氏であることは判明し、返還する話題ものぼったようであるが、実際に本人に返還されるのは、だいぶん後になってからで、東恩納博物館が首里博物館と合併する1953年5月のことである。

1948年2月27日の軍民連絡会議に、軍政府「東恩納の平良為一氏（知事官舎跡）家に誰が大嶺氏を住まはしたか。ストワート氏（文教部長）が聞いて居たが」に対して、志喜屋知事「該家は諮詢会堂、知事官舎－博物館と経て来て大嶺氏は当山文化部長が住まはした」とある。このことからすれば、東恩納の平良為一氏の家は知事官舎として使用

後は、一時博物館として利用されていたかのようであるが、確認の必要がある。

さらに、『沖縄県史料　戦後３　沖縄民政府記録２』には次ようなの記事がみえる。

1949年5月20日の部長会議で、山城文教部長「博物館の個人のもの又は寺のものは返還したい。博物館観覧料を取ったら如何」と提起され、議事が認められている。博物館所蔵の資料で、一部は個人や寺に返還されたものがあるようである。東恩納博物館の展示にみられる仏像の類は金武の寺からのもという記事が先にあったが、これらは現博物館にはなく、金武の観音堂に返還されたということなのか。この点については追跡調査が必要である。ここでいう博物館とは観覧料徴収の件からも東恩納博物館についてであると考えられる。

また、1947年9月の新事業の計画という書類綴には、官房長宛「沖文第八号　1947年9月26日　沖縄文化部長　印」の中に「将来の事業計画・方針等について」がある。

8月28日付知第115号を以て御照会の標記の件につきまして、別紙の通り回報申上げます。一、実施不能の件と其の理由として、首里博物館移転改築の件（目下工務部長の手元に於て準備中）、東恩納博物館敷地の花樹園化する件（予算不足並労務不足の為進捗せず）とある。二、実施及遂行せる事業として、首里博物館の管理・移管（1946年10月首里市より民政府へ移管す）とある。三、将来の新事業として、那覇市に沖縄民族博物館の建設、日本に散在する沖縄文化資料、古美術工芸品の蒐集、古墳調査、史蹟・名勝の調査（観光ルートの作製）、民政府構内に小博物館の設置などがあがっている。

この中で、首里博物館の移転改築がすでに計画として早くからあったこと、並びに日本本土での沖縄関係の文化財収集が民政府においても計画されていたことがわかる。後述の首里博物館の文化財キャラバンは文化部における後押しもあったと考えれる。

嘉陽安春著『沖縄民政府　一つの時代の軌跡』にはハンナ少佐とワトキンス少佐が諮詢会発足直後、諮詢会に対し、博物館の建設を提案し、海軍軍政府と諮詢会の協力により、東恩納博物館が誕生したとある。博物館として利用された民家と庭園に言及して、庭園が「金環園」と称されていたことがわかる。博物館の収蔵品に「金環園扁額」があるが、これは東恩納博物館の庭園の命名に由来する扁額と考えられる。

また、東恩納博物館の写真には2枚の聯が展示室に掛けられているのがみえる。「紫気来鴻宝（紫気は鴻宝より来る）」「青雲起鳳毛（青雲は鳳毛より起こる）」という漢詩の聯である。当初これは大嶺薫氏が書した聯とされていた。しかし、これは「沖縄県立博物館50年の歩み」展で、新城栄徳氏のご指摘により、書家の屋部憲氏（1894～1952年。雅号：金陞）の手によることが判明した。さらに、後述する「沖縄郷土博物館」の看板も同氏の手によるものである。

「金環園」扁額

東恩納博物館の聯

「沖縄郷土博物館」看板

(2) 首里市立郷土博物館の時代

首里市立郷土博物館の創設は豊平良顕氏や上間正諭氏を中心とした首里市文化部の活動の成果によるものである。この点については、上間氏が『30周年記念誌』に記録している。ただ、創設当時の博物館の呼称にどうも曖昧な点があったため、補足の聞き取りを行った。豊平良顕氏はすでに他界されているので、当時の様子を聞くことはかなわないため、上間正諭氏にお話を伺った。

上間氏によると、「あれは全市民の力でできたものであった」と語る。戦前は「文化」という言葉は一般の人々はほとんど用いなかったが、当時はお年寄りまでが「文化」という言葉を口にしたという。豊平さんや上間さんは「文化部のおじさん」と呼ばれていた。

首里中学校の運動場ではドラム缶などを使って仮設の舞台を造り、文化部主催の芝居、女子コーラスから組踊まで開催した。また、豊平と上間の両氏は石川市まで行き、大嶺政寛氏や大城皓也氏などの絵を借りてきた。工務部長の金城田光氏のはからいで建ててもらった２０～３０坪のトタンブキの会場に展示した。場所は現在の汀良公民館の一角あたりである。

博物館の創設はこうした全体の文化運動の中で行われたものである。当時の職員は豊平良顕、上間正諭、事務補助の豊原澄子、労務の2人の5名体制であった。当初、豊平氏は記念運動場あたりを博物館の敷地として目をつけていた。同氏は歴史博物館なども構想として考えていたという。

創設された汀良町の博物館は首里市立の郷土博物館という運営形態であったが、通常

は「郷土博物館」と称していた。当時の看板は、小学校の校長経験者で、古典音楽にも造詣が深かった与那覇政牛氏（1895～1972）に書が達筆であったので依頼して、板に横書きで「郷土博物館」と墨書したものであった。博物館の庭で墨書しているのを覚えているという。同氏によると、「沖縄郷土博物館」（縦書き）の看板ははっきりわからないが、この看板は屋部憲氏（1894～1952）と原田館長が親しくしていたので、後に変えたものかも知れないという。

以上のことを総合すると、当時の博物館は揺籃期ということもあり、正確な名称の統一はなされておらず、“郷土博物館”の愛称のもとに、当初は「郷土博物館」の看板、その後沖縄民政府立首里博物館の頃は「沖縄郷土博物館」の看板が掲げられたが、“首里博物館”の呼称も一方で定着していったと推察される。この看板は琉球政府発足（1952年）後、1955年に「琉球政府立博物館」と改称されるまで用いられたと考えられる。

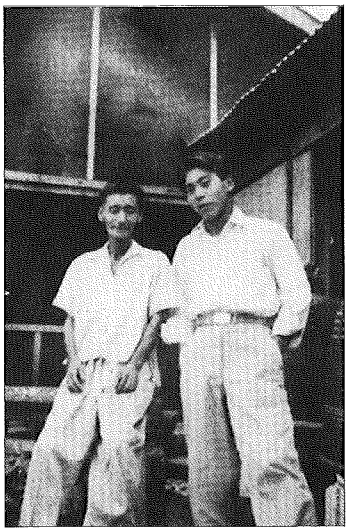
さて、仲本正真氏（大正４年生）は博物館の初期に勤務した方である。1996年6月21日に当博物館で、当時のメモを見ながら語って頂いたことを以下に追記しておきたい。

1948年10月11日、12日に履歴書を提出し、その後採用になった。当時は原田貞吉館長、野崎真美、大浜用光、伊芸オト各氏の５名の職員であった。本人はそれから1950年3月末まで約1年6カ月汀良町の博物館に在職した。

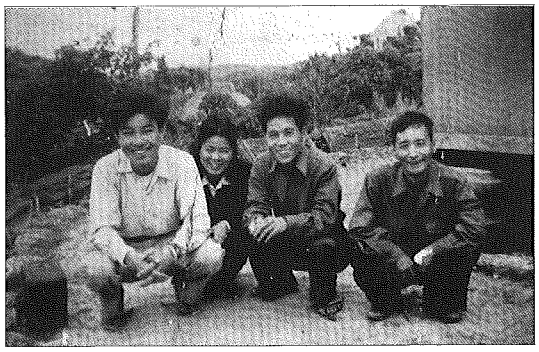
原田館長は豊平良顕氏が新聞社（沖縄タイムス社）を設立するために退職した後の後任として赴任したが、前職は国頭区裁判所判事で、裁判官であった。鹿児島県出身で、小学校2年の頃には沖縄県庁の門番をしたという。裁判所に給仕で勤めるようになった。16才で俳人として金賞をもらう。現在、御遺族は埼玉県に在住という。

仲本氏は1948年11月17日当時には460円の月給で、手取りは400円であった。12月31日に392円の給料を支給された。これらの金額は、当時の芋の130斤の値段に相当したという。当初の仕事は石垣を積んだり、庭に花を咲かせるために、あちこちを廻って花の苗を植える作業をした。そのような作業の傍ら、同年の11月25日から28日にかけては首里市の産業振興展（会場は首里中学校）に博物館の資料を出品した。12月19日は首里市の移動３周年の記念行事があり、仮装行列などが催され大変賑わった。当日は、中国人やロサンゼルスの県人２世なども絶えず博物館に足を運んでいた。

その頃の勤務体制は、朝8時頃出勤し5時までの勤務時間であった。博物館は毎日開館し、職員は交替して休みを取っていた。午前、午後の交替で組むこともあった。いずれにしても、周1日は休日が取れるように配慮されていた。来館者が多いのはやはり日曜日であった。



首里博物館時代の職員①
野崎真美（左）、徳山盛喜の両氏



首里博物館時代の職員②
左から、吉田朝啓、安里伊集子、
外間正幸、野崎真美の各氏

1948年12月21日には、「博物館復興資金募金興業」の計画をするため、館長・大城・仲本が山田・高江洲両氏に相談にいくが、二人は糸満に出張中で会えず。

1949年2月11日に仲本氏は2月から3倍の増俸になる。家族手当200円（B円）であった。また、この頃から配給品が5～6倍に値上げになったという。

1949年5月12日には月給は税引きで1,194円であった。その頃の米の１カ月の配給は2斗7升6合で、572円の相場であった。

1949年5月19日博物館が軍予算に編入される。民政府の成人教育課（安里源秀、仲里金雄氏らが職員）の管轄ではあったが、予算は軍政府管理となる。

10月19日博物館の移転についての話のために図書館の城間チョウビン氏が来館する。当時、文化財の資料を集めるのにも様々な情報を収集して、「どこに何があるか」聞いて廻ったりした。放生橋の石彫も民間の家にあったものを収集した。円覚寺の総門は火災にはあわずに壊れたが、それらの残骸は人々が家に持ち帰って家造りに使用したりしたという。

琉球政府編の『琉球史料　第１０集』には首里博物館の行事日記が掲載されている。これは当時職員だった仲本氏が書き残した貴重な日誌である。本資料は当館の『博物館沿革史』（1954年以前）に綴られているべきであるが、これについて原資料は遺憾ながら残されいない。50年史には紙幅の都合などもあり採録できなかったが、当時の貴重な情報を含んでいるため、ここで再度掲載しておきたい。

首里博物館

1949年

1月

自22日 名護ハイスクールに於いて当館移動

至24日 博物館開催、出品点数23点。一般の好評を博したり

8日 弁ヶ岳方面へ蒐集を行う。墓庭に遺棄せられたる蓮華院系統高僧の骨壺3個、瓢箪型飴釉花瓶1個を蒐集す

2月

浦添世衰へ視察並蒐集へ。英祖王の墓には大石棺3個、尚寧王の墓には大石棺1個、小石棺2個あり、300年乃至600年前の作としてその手法、技術 彫刻等素晴らしきものあり、然るに、蓋にある獅子その他花鳥等の彫刻を学童等が破損持去りたるらしき形跡あり、将来右記の石棺は博物館に移動保存する必要ありと認める。今にしてその侭放置するに於ては優秀完全なる石造美術品を破滅喪失するに至らんことを 憂う

4月

4日 ライカム勤務ブレイク氏の夫人日本民芸協会長柳宗悦氏の紹介により又吉副知事島 袋官房長、比嘉渉外局長同道して来館将来博物館、図書館の復興、整備につき協力 し度旨申述べらる

17日 来島中の青山学院大学教授比屋根安定氏は沖縄キリスト教同志会主事岩原繁勝氏帯 同米館、在日沖縄人が郷土の文化問題につき多大の関心を持ってをり、在日沖縄文化協会に於いては沖縄の史料、美術品等の蒐集に力を注いでおり、終戦前後の博物館の状況、将来の運営、希望等を知り度旨話さる

5月

本月は特に遠足季節にて学校、青年団体並に外人家族の観覧が多く、高学年生並に青年団員に対しては、その希望により館長から琉球文化に関する啓蒙的な講演をなしており、これら青少年の郷土認識に些か益するところあるかと思われる

8月

最近の注目すべき傾向として絵画、彫刻、陶器、漆器、音楽等の専門家が研究資料を求めての来館及び初中学校生徒の社会科の一課題としての団体見学、その他各新聞記者の来館が特に多くなって来たことである。これは社会の博物館に対する関心と認識が深くなりつつある徴と見るべく、館員もこれら沖縄文化の研究と向上に努力される方に対しては特別の便宜を図り、尚社会科学習の生徒の郷土に

対する認識を一層深めるよう努めている次第である

15日　沖縄青年連合会より副会長米須氏等来館同会発行の雑誌に沖縄歴史に関心して寄稿方依頼があった

9月

10日　文教部図書編輯官城間正雄氏沖縄歴史編纂につき懇談並に次史料を求むるため来館

11日　第一航空隊教育係長フランク氏並にサイモニック氏山城文教部長の案内にて来館同氏は目下沖縄歴史、風俗、伝説などの研究をなされて居る由にて、3時間余に亘り収蔵品の研究並びに撮影をされた

14日　館長午前10時より外国語学校首里分校に於いて「琉球の文学」について講演、午後7時より外国語学校に於いて「古琉球の海外発展」について講演

10月

11日　館長、民政府に於いて開催の名勝史蹟保存対策懇談会へ出席。野崎美術官首里市池端区に出張し、世持橋の石欄羽目2個を蒐集す

23日　当博物館の現在の敷地は狭隘にして、交通の便も悪く早急に移転の必要があり、原田館長、仲本秘書官は敷地選択のため尚家跡、その他を視察

24日　原田館長は午後より成人教育課長安里源秀氏、同視学官仲里金雄氏、建築技師仲座久雄氏等と共に史跡視察のため浦添世衣へ出張。石棺（330年前のもの）の破片6個蒐集

自25日　原田館長は蒐集並に講演のため与那城村伊計島へ主張。伊計城趾より古陶器
至28日　（香炉）及古支那青磁破片を蒐集

31日　美術家協会屋部憲氏博物館の移転問題等につき懇談のための来館

11月

9日　成人教育課仲里視学館、建築技師仲座久雄氏史跡保存会常任委員会開催につき打合せのため来館

10日　沖縄タイムス主事史蹟保存会常任委員豊平良顕氏、成人教育課仲里、佐久川視学官史蹟保存会常任委員会開催につき打合せのため来館

19日　志喜屋沖縄知事来館視察
赤絵酒家、赤絵対瓶各1個購入、戦後初めての優秀品

22日　首里市桃原区松島朝信氏より豊見城殿内の家紋入白灰釉香炉1個（大型）購入

27日　上間朝久氏李朝鉄絵瓢簞型徳利1個寄託出品（古朝鮮陶器）同氏より古琉球赤絵茶碗1個購入

12月

4日　胡差高校喜名分校の歴史担当教師宇根信一氏沖縄歴史の教材を求めて来館。午後仲里視学学官、原田館長、仲本秘書官は博物館移転予定地として軍政府に申請すべき旧沖縄師範学校体育館跡を実地測量す

9日　博物館移転促進につき懇談のため名渡山画伯来館

10日　博物館移転促進につき懇談のため美術協会屋部氏来館

15日　午後2時より博物館に於いて史蹟保存会の事業運営並に博物館、図書館の移転問題打合せのため首里近在の史蹟保存会常任委員及び幹事参集、委員会を催す

27日　原田館長及仲本秘書官は民政府に於いて開かれる史蹟保存会常任委員会に出席

1950年

1月

14日　午後1時より博物館事務室に於いて史蹟保存会常務委員会開催（観光地となるべき史蹟名勝施設の復興問題につき協議）

15日　原田館長仲本秘書官は首里市役所に於ける史蹟保存会小委員会に出席（首里関係史蹟名勝復興につき協議）

17日　原田館長、仲本秘書官は観光地となるべき史蹟名勝視察のため安里成人教育課長外3名と国頭、中頭へ出張

20日　原田館長は午後2時より首里市役所に於いて開催の首里市観光地復興委員会へ出席

3月

1日　原田館長、仲本秘書官は民政府会議室に於いて開催される史蹟保存会常務委員会へ出席

28日　ハワイよりの観光団46名来館、原田館長は民政府の委嘱を受け観光団の史蹟 名所観光旅行の説明係として中頭、国頭出張

4月

6日　米国ワシントン大学人類学部助教授アーレン・スミス氏及同夫人は又吉副知事、山田有幹氏の案内にて来館

9日　首里氏当蔵区1班175号我謝幸正氏は首里城下円鑑池より拾得した掛鈴1個（日本年号「明和9年」－西暦紀1772年に該当－と刻まれている）を寄贈

18日　原田館長は伊江氏の通報により首里城趾より発掘された古石碑を見分したが、そ

れは112年前に来島した支那冊封副使高人鑑の筆（「玉漱」）であることがわかった

博物館に収蔵の必要があると思料する

5月

16日　仲里成人教育課長経由佐々木辰雄氏より3百年前の首里、那覇鳥瞰図1、那覇福州間航海5体図1、寄贈

19日　桑江良慶氏より旧藩時代に於ける冠婚葬祭に関する典礼記寄贈

7月

2日　琉球文化研究会主催尚巴志玉陵調査（佐敷村）始まる

15日　首里市復興祭のため紅型図録展示会を市役所にて開催。観覧者約1万人に及ぶ

8月

7日　国王歴代一覧表作製

12日　首里市大中区佐久川寛貞氏より円覚寺方丈鬼瓦の寄贈を受く

26日　紅型研究家城間栄喜氏鳳凰図案研究のため来館

9月

12日　額、大皿1個購入。東京沖縄文化協会より「紅型図録」「琉球の建築」寄贈受く

10月

1日　本日より4日間首里文化財保存会主催の芸術祭に出品、移動展覧会開催

4日　芸術祭終了、観覧人4千人

14日　午前中館長は職員2名と共に那覇高校社会科展に出品並に協力のため出張。本日より3日間

16日　那覇高校社会科展終了、3日間の観覧人6千人

23日　泊エンジニア部隊通訳山口栄一は部隊内の米人に沖縄文化を紹介するため資料蒐集に来館

26日　博物館の現状並に将来の復旧に付、海外の同胞に訴える趣意書作製提出

31日　館長並に外間秘書官は親泊政博氏の将来に係る日本に於ける「沖縄財団」寄贈の紅型型紙13枚、刳舟模型1個、宮古上布裂帳、青貝御椀1個外4点を民政府にて受領

11月

11日　台風襲来、台風の予報を受けるや直に全員にて応急対策をなす。午後より風速烈しくなるも丘の台上にあっては如何ともし難く対策のすべなきままに左の如く被害を蒙る

1、屋根東側角のトタン剥奪され、そのため窓に掛る円覚寺欄間彫刻大額落下し陳列せる所品の獅子破損、尚、薄板製陳列台2台破損（カンバス窓3枚吹飛び、読谷テーサージ2枚紛失）

1、博物館正面の石彫刻を置ける台地の落盤より石彫刻地盤と共に約3米の穴に落下す

1、館長住居の宿直室の茅屋根の総茅飛散する

12月

2日　東京沖縄財団理事、親泊氏郷土古文化財に関する在郷人との今後の連絡並に後援を依頼す

29日　3カ年計画博物館施設費作製のため職務会開催す

1951年

1月

26日　明日より開催さる首里高等学校展覧会に移動展を開催すべく、陶器類の整備をなし、なお民間所の紅型、織物の優秀品数10点を陳列す

27日　展覧会午前9時開催さる。当館移動展の陶器、漆器、織物を陳列せる部屋は第1会場に当り、ビートラー少将婦人、セフワー大佐をはじめ米国人、日本人多数の観覧人あり、観覧人約3千人

28日　昨日より観覧人多し。部屋の設備良きため陳列品は今迄になき見栄を感ぜしめ、観覧人をひきつける。観覧人約1万人

2月

23日　沖縄織物会社豊見本盛信氏は読谷花織タオルの作製を企図し、見本見学のため来館。大平窯業合資会社代表社員、木村昌宣氏は琉球古瓦の研究資料を求めて来館

3月

12日　2月12日より7日迄琉球大学に於いて開催されたる情報教育会議にて博物館関係委員会に於いて提案せる「文化財保護法」再検討のため軍通訳官安里氏玉木社会教育課指導官来館、合同会議の後成存を得る

4月

13日　琉球大学照屋教授は在米米人宣教師ブルー氏よりの要求により琉球古代人の使用せる用具類につき研究のため来館

15日　米軍雇用日本土建業者顧問木村香氏来館日本に紹介すべく博物館の撮影をなす。木村氏は着任以来在琉日本人土建業者に首里博物館の紹介に勤め数度に亘り日本

土建技術者を引率し来る

28日　紅型研究家城間栄喜氏来館、紅型型紙の作製について館員を共に研究す。なお最近作製せる風呂敷等を参考品をして持参し、化学染料に依る紅型の現代化せる色彩等につき実物研究をなす

5月

22日　那覇情報会館にて開催さる西郷遺品展並に琉球文化に紅型図録並に紅型風呂敷、テーブル掛け等を出品す

30日　米軍政府官府勤務L・S・Hawcach氏琉球歴史研究のため来館、殊に工芸文化に於いては写真や実物を参照しつつ詳しく説明す。館長北部地区の講演を終り、牡丹唐獅子模様古紅型引幕1枚蒐集帰館す

6月

6日　南部地区社会教育幹部指導講演習会が那覇情報会館にて開催され、館長講師として講演す。同時に当館より陶器、紅型、紅型図録、宮古上布、写真帳、其他優秀品を出品し講習員の観覧に供す

12日　館長、外間秘書官午後より崎山区墓地徳村家の、石棺、首里城趾の碑文（飛泉玉漱）運搬準備をなす

13日　午後より当館の主催に依る文化研究会を情報会館にて開催。文化研究員幹部13人集会後3時間に亘り今後の文化財保存会の発展について検討。なお博物館改築等の打合せも行われた

20日　館長は文化財保存会副会長屋部憲氏と共に博物館建築、文化財問題について中央政府並に群島政府知事訪問

7月

12日　館長は漢那憲英氏より那覇安慶田家墓の厨子甕の鑑定を依頼され、館員と共に同地へ赴く。後辻原墓地一帯の厨子甕の調査をなす

18日　館長は那覇の旧家安慶田、嘉手川両家の依頼により午前8時館員と共に辻原墓地へ趣き安慶田家、厨子甕3個（乾隆年代）外4点を博物館へ搬入す

22日　安慶田家墓地より厨子甕コバルト釉塗（乾隆年代）2個を蒐集す

31日　博物館建築問題並に文化財保存問題協議会を当館にて開催す
群島知事文教部長、首里市長、各新聞社関係、文化財委員等出席両問題の討議をなす

8月

7日　早朝館長は自動車を交渉し館員と共に辻原墓地に蒐集、残置の厨子甕全部（13個）を運搬す。午前中、年代順に土器、康熙、雍正、乾隆、嘉慶、道光、咸豊、大正、昭和、に亘る24個の厨子甕を整備配列す

午後3時群島知事は新首席民政官チャップマン大佐を案内当館を視察す

25日　館長崇元寺復旧座談会録音のため民政府情報係へ出席

30日　来月6日より情報会館にて開催さる文化財展覧会に備えて本日より館員全員にて出品物の整備を始む

9月

4日　ブラジル日本新聞社長仲真美登利氏来館館長博物館の現状を説明の後、同氏より海外に紹介せしむべく博物館の沿革、収蔵品一覧表、観覧人員、統計表等最近作製の資料パンフレットを提出す。5日展覧会出品物の整理完了し、本日館員全員にて情報会館へ運搬、陳列をなす

6日　崇元寺石門起工式が午後2時より行われ終了後文化展覧会開催さる。当館よりの出品物は陶器、織物、紅型等総数39点におよぶ。開催前館長はルイス准将に陳列品の説明をなす

8日　3日間に亘って行われた展覧会は多大の効果を納め本日午後4時半盛況裡に終了す。

23日　米国スタンホード大学教授ゼイムス・L・テイグナー氏は琉球新報社長又吉康和の案内にて来館、館長一時間余に亘り沖縄古代美術の説明をなす。当館を去るにあたりサイン帳に「沖縄の将来の発展は、沖縄人の誠意と勇気によって得られる」との言葉を残す

10月

16日　日本より派遣され、目下沖縄視察中の桜田、関両氏民俗学者は琉球古文化視察のため来館。18日桜田、関、島袋全発、豊平良顕氏等を招待し、文化懇談会を実施

11月

9日　3時55分ビートラ副長官は米軍随行員22名、比嘉中央政府首席、平良群島知事、山城副知事、当間那覇市長外新聞記者11名と共に到着。館員全員にて出迎、館長約15分間陳列品の説明をなし、後茶菓子を呈し、副長官婦人へ新紅型風呂敷1枚贈呈す

20日　新築博物館敷地の整地本日午前中にて完成す

12月

21日　沖縄興行会社の映画「よみがえる沖縄」撮影本日より開始、館外の石造彫刻、辻

原墓地群、厨子甕の撮影をなす

23日　真和志中校に於いて産業復興共進会展覧会開催さる。当館より紅型15点、織物10点、陶器13点、漆器5点、石造彫刻3個、その他参考品数10点陳列す。知事を始め群島政府職員各学校団体見学者、地方よりの観覧人多数あり、約3千に及ぶ

24日　世持橋の海洋石彫、円覚寺の海洋木彫刻は琉球建築に依る当時の写真と対照。観衆の最も注目する所となる

25日　本日最終日はクリスマスに当り、内外の観覧者最も多く約7千に達す。午後5時盛況裡に終了す

東恩納博物館

1949年

9月

8日　沖縄産業視察のため来島中の米国スタンホード大学教授ジョンソン氏、ミラー軍政官、スケアリー司法部長は志喜屋知事、又吉副知事、比嘉渉外部長と共に午前9時半来館。沖縄の文化財の片鱗を館長提出の戦前の写真を対照しつつ鑑賞す。特にジョンソン氏は古美術品陶器類に対しては相当の見識あり、日本語を以て詳細に説明を聴取された。引続き別館金環園に立寄り暫時休憩。沖縄産の御茶を喫しつつ現スタンホード大学の政治部教授ワツトキンス氏が海軍軍政府時代政治部長として沖縄に 於いて活躍されし当館を物語り親友ワツトキンス氏を記念すべき金環園の保存ある に感激され一同満悦裡に懇談12時半退園、館長も石川市役所迄随行した

11月

23日　大島博物館主事文英吉氏来館、琉球古代文化と大島のあり方に就いて相互の意見交換をなす

1950年

2月

23日　館長、首里工務部出張所前に古い磁盤放置しあるを探し出し現場を調査す。円覚寺本堂の蓮弁彫刻礎盤 3個首里城正殿礎盤3 個あるを認め、後日博物館へ移管方を交渉す。なお円覚寺並に首里城の掘り返し跡より古瓦片及古陶片を採集帰館す

3月

28日　絵画の特別展示を計画（ハワイ観光団歓迎のため）越来より大嶺政寛氏画6点、

山里栄吉氏画5点、普天間より山田真山氏画2点を借用臨時陳列をなす

30日　ハワイ観光団来館、博物館入口の線路一面に歓迎塔を建て絵画の特別展をなし粗茶の準備をなす

4月

24日　民政府創立4周年記念資料展

30日　大宜味村根路銘区敬老会60才以上の男女61名外視察員と共に来館、館長残れる沖縄文化財に対し説明をなせば感泣するもの多し

5月

13日　館長文化研究会の浦添世衰墓踏査研究座談会出席のため民政府へ

24日　館長、美里村知花の知花城趾並に鬼大城の墓碑調査へ

6月

24日　沖縄文化研究会

26日　館長史蹟調査のため具志川村へ

27日　館長、勝連城趾を調査し勝連村平安名旧部落に至り古陶油壷（口疵）2個を探すなお旧家中村家の系図並に遺物を調べて帰る

7月

2日　館長、沖縄文化研究会員と共に佐敷村の佐敷世衰鮫川大主墓調査に出張す

8月

14日　明日の石川警察署落成祝展示会の歴史資料作成終了提出す。資料、沖縄歴史の概要と琉球王統記，琉球王朝時代の政庁組織，中央政庁と地方政庁当時の法制と司法機関に就いて、東恩納番所並に仲泊番所の沿革、その他ポスター

29日　首里芸能祭出品物借受のため首里博物館長原田貞吉氏、画家名渡山愛順氏外2名来館衣類10点漆器陶器類10点貸与す

10月

1日　首里芸能祭本日より開催館長美術工芸館の説明応援をなす

日誌最後の東恩納博物館の行事日記は仲本氏が記録したものかどうか明かではない。しかし、これらの日記を読むと、文化財の収集がその都度ことある毎におこなわれていたのがわかる。

1949年5月の日誌にある「本月は特に遠足季節にて学校、青年団体並に外人家族の観覧が多く、高学年生並に青年団員に対しては、その希望により館長から琉球文化に関す

る啓蒙的な講演をなしており、これら青少年の郷土認識に些か益するところあるかと思われる」という記事は、博物館の教育普及的な活動の萌芽として興味深い対応である。現在、博物館では団体対応でオリエンテーションを行うのは一般的であるが、戦後間もないこの頃から見学に際しての講演を組んでいる点は特記されるべきことである。

一方、同年8月にある日誌「最近の注目すべき傾向として絵画、彫刻、陶器、漆器、音楽等の専門家が研究資料を求めての来館及び初中学校生徒の社会科の一課題としての団体見学、その他各聞記者の来館が特に多くなって来たことである。これは社会の博物館に対する関心と認識が深くなりつつある徴と見るべく、館員もこれら沖縄文化の研究と向上に努力される方に対しては特別の便宜を図り、尚社会科学習の生徒の郷土に対する認識を一層深めるよう努めている次第である」という点も注目される。社会科学習の一環としての博物館利用がこの頃から取り組まれていたこと、また研究者や新聞社などが一定の目的をもって調査や取材で博物館を利用し始めている動向を指摘できる。

また、この頃には展示会が種々の形態で開催された。多くは各種の記念行事や展覧会にあわせた移動展である。首里博物館に関しては、名護ハイスクールにおける移動展、首里市復興祭のため紅型図録展示会（市役所）開催、首里文化財保存会主催の芸術祭移動展覧会、那覇高校社会科展に出品並に協力、首里高等学校展覧会に移動展、那覇情報会館にて開催さる西郷遺品展並に琉球文化、南部地区社会教育幹部指導講演習会（那覇情報会館）への出品、崇元寺石門起工式後の文化展覧会、真和志中校における産業復興共通会展覧会などである。東恩納博物館においては、民政府創立4周年記念資料展、石川警察署落成祝展示会などへの出品や展示資料作成である。このような展覧会は当時人気があったようで、観覧者が6千人とか1万人と、戦後の生活復興期の中、想像以上の活気がある展覧会だったことがうかがえる。

なお、東恩納博物館では、博物館において特別な展示を企画したことが知れる。1950年3月の日誌に「絵画の特別展示を計画（ハワイ観光団歓迎のため）越来より大嶺政寛氏画6点、山里栄吉氏画5点、普天間おり山田真山氏画2点を借用臨時陳列をなす。」という部分である。ミニ企画ではあるが粋なはからいである。

さらに、首里博物館と東恩納博物館が資料の借用交流をおこなったことがわかる。東恩納博物館の日誌の1950年8月29日で「首里芸能祭出品物借受のため首里博物館長原田貞吉氏、画家名渡山愛順氏外2名来館衣類10点漆器陶器類10点貸与す」とあることから、首里博物館への資料貸し出しがおこなわれた。

首里博物館は、建物の老朽化、敷地の狭隘等によりはやくから移転計画がすすめられていた。1949年4月の日誌に「ブレイク氏夫人、日本民芸協会会長柳宗悦氏、又吉副知

事、島袋官房長、比嘉渉外局長等と将来の博物館の復興、整備につき協力し度旨申し述べられる」と、また同年12月の日誌以降には「博物館移転促進懇談のため○○氏来館」と数回あることから、開館草創から敷地の狭さや交通の便の悪さなど多くの問題を抱えていたことがうかがえる。

さらに、博物館資料のためだけの文化財収集だけではなく、各地域に残された史蹟保存の調査にも出かけたりしている。1949年10月の日誌には「・・・史蹟視察のため浦添世衰へ出張。石棺（330年前のもの）の破片6個蒐集」、同年12月の日誌には「史蹟保存会の委員会をもつ」など、戦災を幸いにも免れた史蹟の保存、管理にも積極的に協力していることがわかる。

余談であるが、首里博物館の日誌から読み取れるように、博物館のそばには原田貞吉館長の自宅もあった。そのため、人によっては原田氏の個人の私設博物館と受け取った人もいたようである。

ここで、「琉球史料　第十集」に掲載されている当時の博物館への入館者統計の記録を紹介しておきたい。別表１～３がそれである。

首里博物館の観覧人員一覧表より、1945年4月から1951年10月（およそ7年間）まで、総計観覧人員は約91、266名（表の総計数の合計）である。その内訳を見てみると、外国人に比べて沖縄人の入館者数が多く、その中でも成人男女を押さえて、学生の数が圧倒的に多いことがわかる。

戦後、荒れ果てた沖縄において文化や伝統を肌で感じることのできる博物館は、当時何も無かった学生達にとって最良の学習の場を提供したと思う。学生達はここで、失った文化遺産の尊さや重要性等を再認識し、沖縄の文化を誇り自信へとつながっていっただろう。

一方、東恩納博物館は資料として記載されている内、1945年度の1カ年しか観覧人員の統計表しかないのが残念である。この少ない資料から言えることは、沖縄人の観覧人よりも米人の数が上回っていることである。そもそも、東恩納博物館は米国人の軍属を中心に、沖縄文化の素晴らしさを理解してもらう意図もあり、建てられた博物館でもあった。そのことから、この結果は納得できる統計表である。

このように東恩納博物館と首里博物館では入館者の内容に大きな相違がみられた。入館者数の総数は首里博物館が多い。しかも入館者の多くが沖縄の地元の人々である。一方、東恩納博物館は米国人がかなり多い割合で観覧している。この点は当時の職員の佐市次田トミさんが語っているように、米国人がよく訪れたことがわかる。また、入館者自体のの統計の取り方が米国人、フィリピン人、中国人などに分けられ当時の時代背景をよく物語っている。

表—1　自1949年至1950年3月　東恩納博物館

1ヶ年間参観人員表

国＼月	4月	5月	6月	6月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計	各月平均
米　人	635	786	877	637	248	406	349	478	488	741	843	754	7248	604
比島人	161	126	98	54	47	39	26	62	80	135	173	106	1107	92
中国人	17	37	11	0	2	0	0	4	0	0	0	0	71	6
沖縄民	785	702	498	128	126	254	193	330	348	529	773	1153	5819	483
計	1598	1651	1484	819	423	699	568	883	916	1405	1789	2013	14245	1185

表—2　1950年観覧人員表　首里博物館

国別＼月別		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
外国人	米人	210	174	62	145	88	53	42	53	83	142	77	89	1218
	比島人	8	6	9	3	0	5	5	0	0	0	0	0	36
	其　他	15	0	0	0	3	3	3	3	7	2	5	44	85
	計	233	180	71	148	91	61	50	56	90	144	82	133	1339
沖縄人	成人(男)	600	246	231	373	295	294	4424	580	510	3260	461	352	11626
	成人(女)	203	53	90	220	184	88	3401	461	286	3125	344	214	8669
	学　生	961	614	1857	1415	2591	497	3674	755	532	4308	874	365	18443
	計	1764	913	2178	2008	3070	879	11499	1796	1328	10693	1679	931	38738
	総　計	1997	1093	2249	2156	3161	940	11549	1852	1418	10837	1761	1064	10077

表—3　1951年観覧人員表　首里博物館

国別＼月別		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
外国人	米　人	86	122	39	34	42	52	50	6	70	69			483
	日本人	46	76	62	18	17	65	66	22	54	27			426
	計	144	198	7101	52	59	117	116	28	124	96			909
沖縄人	成人(男)	486	5766	324	318	417	328	493	372	919	313			9423
	成人(女)	176	4350	130	204	173	237	260	306	611	262			6447
	学　生	449	4700	326	297	2034	371	1145	297	730	440			10349
	計	1111	14816	780	819	2624	936	1898	975	2260	1015			26219
	総計	1125	15014	881	871	2683	1053	2014	1003	2384	1111			27128

2　初期の文化財の収集状況

博物館草創期の文化財の収集については沖縄県立博物館『30周年記念誌』(1976) で詳しく語られている部分もある。また、今回の50年史でも追加補充して初期の収集状況や活動について記述した。しかし、それに関連して、初期の個々の資料の収集先やその背景となると、ほとんどわからないのが現状である。その一例をあげてみたい。

1953年6月、原田貞吉館長は本土から文化財約80点を収集して帰沖している。これは最初の日本本土での文化財収集活動であるが、博物館の記録では東京や京都各地で収集されたというが、それ以上はっきりしたことはわからない。この時期の収蔵品台帳(1953年6月～7月) を開くと、京都からの寄贈であれば兄弟である永田万蔵及び永田七郎両氏 (住所未記載) からの、紅型や織物、ティサジの寄贈品と考えられる。ただこれらと関係しそうなものを含めても30数点である。他は購入として、花生・茶家・徳利などの陶器、琉球人行列などの文書絵図類、紅型や絣着物、螺鈿文庫などが入っている。このようなものを含めると80点近くにはなりそうである。しかし、はっきりした内容は不明である。また、購入についてはその相手先は不明である。

永田万蔵氏のコレクションについては50年史編集の過程で、その所在がわかり連絡がとれたこともあって、京都の呉服商「えりまん」を経営された人物であることがわかった。兄弟で経営し、末弟の永田七郎氏が沖縄に興味を持ち、戦前何回か来沖して手に入れた資料であることが判明した。すでにお孫さんの代になっているが、その手元には琉球政府比嘉秀平主席からの感謝状が残されていた。

このように、初期の収集活動については当時の記録が残されていないことから、当館の収蔵品台帳にも各種の情報が記載されていないものが多い。当時の収集活動としてみれば、記録を十分に残せるような体制ではなかったと考えられ、この点はいたしかたないと思われる。そこで、ここではいくばくでかでも当館の「収蔵品台帳」や関連資料、とくに新聞記事から、資料の収集先の状況や旧所蔵者の背景、その入手経路、もしくはその発見経緯などについて記録にとどめておきたい。

1952年から1954年にかけては戦災からまぬかれた八重山からの資料収集が積極的におこなわれたという。中国冊封使からの書軸、紅型の舞台幕、風呂敷や衣裳などの染織資料、陶器類が目だつ。台帳を見ると、収集相手先に崎原当好、宮良当勝、稲村賢敷、上勢頭享、東江太吉、森田孫栄、村山信好氏らの名前がみえる。収集・購入者は原田館長である。当時の新聞記事 (新聞社・年月日不詳) によると、「在伯の仲尾権四郎氏 (羽地出身) から南米時事新報社長仲間美登里氏を通じ沖縄民芸研究に使って貰いたいと日本円20万円を贈ってきたので八重山の大浜永三氏他諸氏の援助のもと各旧家を訪問、宮

良当智、同当勝、崎原当好の三氏らの斡旋で沖縄、朝鮮、南方、日本伊万里等の漆器、陶器、掛軸など104点の寄贈または譲受けて持ち帰った」という。当時の資料の収集の背景には、在伯の仲尾権四郎氏から当時20万円という多額の寄付金を受けたことにあった。この件については、「文化財蒐集計画に付いて陳情」(1952年)書に簡単に記されているのみであるが、仲尾氏の寄付は、戦後の沖縄復興期における海外移民の人からの文化的な支援として特筆されるべきである。収集された資料は崇元寺の日琉会館で「古文化財の展示会」として観覧に供せられた。

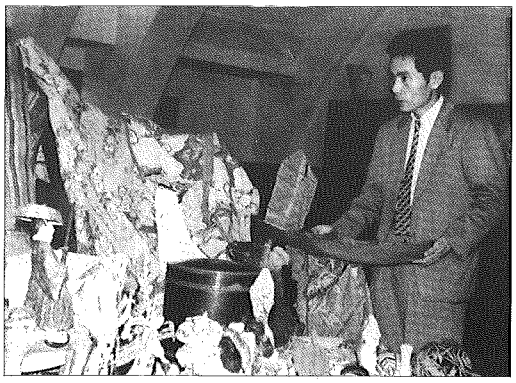
1955年11月に、山里永吉館長が本土から文化財140点を収集している。この時の主な収集先は台帳からすると、奈良、京都、東京であったようだ。奈良県の黒田壷中氏から多くの陶磁器、また京都市の西村千之助氏から花織ティサジや着物、絣着物や紅型着物、同じく京都の中川伊作氏から東京の伊藤裁子氏から紅型風呂敷、黒朝衣、漆器の御供飯などの提供をうけ、購入している。

さらに、翌年56年11月同じく山里館長が本土から文化財50点を収集し帰沖した。この時も京都と東京が主な収集先である。京都の中川伊作氏、東京の伊江朝助氏、財団法人啓明会(東京?)などから書画や漆器、陶磁器、紅型型紙などを購入している。

この山里館長の本土での収集活動は多くが購入をしているものであり、予算をたてて計画購入したと考えられる。この点は50年史に所収した「文化財蒐集計画に付いて陳情」(1952年)をみれば明らかなように、1952年頃から蒐集のために予算獲得の要請が行われていた。

30年史には「1958年5月、外間正幸主事が本土から文化財115点を収集購入して帰る」とある。この時の収集はどのような経緯であったのであろうか。1958年5月7日付の琉球新報では外間正幸氏が本土で文化財を収集したときことが記されている。この時は紅型織物や「舞楽図(琉球人舞楽絵巻物)」、琉球漆器、玩具など貴重な資料を収集している。この時の収集品は京都の版画家中川伊作、東京の日比谷高校教諭の我部政達、仲原善忠、高島屋美術部長中井敬助氏他の沖縄関係の篤志家の所蔵品であった。舞楽図は沖縄タイムス1958年5月15日付の新聞記事では仲原善忠氏蔵となっているが、琉球新報の同日記事では東京の某氏からの譲渡となっている。ただ、収蔵品台帳では千葉県在住の人物からの購入であり、諸般の事情があったようで確認の作業は必要である。

郷土玩具の寄贈は日比谷高校で美術を担当していた我部政達氏が収集したものである。我部氏(神奈川県大磯山王町1801)は那覇出身で、教鞭のかたわら東洋の民芸品、玩具の収集をしいていた。寄贈の資料は所蔵の一部で、唐船、サバニ模型、手まり、「シシ舞」や「チンチン馬」などがある。また、紅型には絹地に浅黄を染めた風呂敷や



外間正幸氏の文化財収集
（1958）

外間氏の文化財収集キャラバン
（1961）

トンバン（トゥンビャン）朱綾経縞衣裳など、さらに工芸品としては櫛箱、かつら箱、御供飯などがある。これらはいずれも大正13年に東京美術校の卒業製作のために帰郷、その後沖縄師範に奉職していた4年間に集めたものの一部である。戦時中はこれだけは残しておきたいと、防空壕に入れた大部分が全滅した中でこれだけが幸い残ったという。その頃の博物館には琉球の玩具はなく、戦前の民俗資料として貴重な寄贈であったことがわかる。

これらの文化財収集は外間氏が4月4日に那覇を出発し、鹿児島、熊本、福岡、岡山、京都、奈良、名古屋各地の博物館を視察し、同時に沖縄関連の文化財を収集している。その後、東京の文化財を購入して陶器、漆器、織物、染物、書画など約100点余りを携えて5月19日に帰島した。45日間にわたる長期間の収集旅行であった。この収集は原田貞吉、山里永吉両館長が各地を廻った時に、譲り受けたいと打診してあったもので、その仲介役として文部省の森政三氏が協力している。

1959年6月、外間正幸主事が本土から文化財89点を収集して帰る。これらは東京都内で収集されたもので、外国船のジャクソン号で運ばれた。文化財は紅型衣裳11点、紅型風呂敷11点、琉球織物2点、芭蕉布1点、かすり1点、陶磁器6点、手さじ類11点、紅型型紙20点などがあった。

大津久之介（元大阪商船沖縄支店長）、森政三（文部省技官）両氏の寄贈品をはじめ、東京沖縄県人会長の神山政良氏所蔵の尚泰王の遺品があった。神山氏のそれは尚泰王の遺品のフィーターと、同氏の妻八重子さんが尚泰王の六女であったことから、嫁入り道具の一つだった尚家紋入りの漆器枕である。フィーターは紫地の緞子に、王族でなければ使用できなかった金色の龍文様が刺繍されたものである。中国の清朝から尚泰王に贈

られたもので、神山氏にとっては一対の漆器枕とともに、昭和14年に病没した八重子夫人の形見として愛着のこもる品であった。同氏は「いろいろ思いのこもるものではあるが、私有するより郷土のお役に立つことにでもなれば」と語っている。

博物館の収蔵資料は、単に博物館資料としての側面のみならず、収蔵される以前の人々の愛用のものがあり、さまざまな意味をもつ資料でもある。博物館の展示においては展示ストーリーの展開による制限もあるが、元の所有者の「顔」がみえるような展示も必要であるように思われる。最低限、寄贈品には提供者の氏名は記すべきだと考える。それが博物館へ個人愛用の資料を寄贈していただいた方々へ、常に感謝の意を表す唯一の手段だと思われる。寄贈後、数年してあるいは子どもの代になって博物館を訪れ、もし展示されているときに、寄贈者名があるのとないのでは、博物館の対応として格段の違いがあるのは否めない。旧所有者の「人となり」がみえる展示は一つの方向性を与えると思われる。

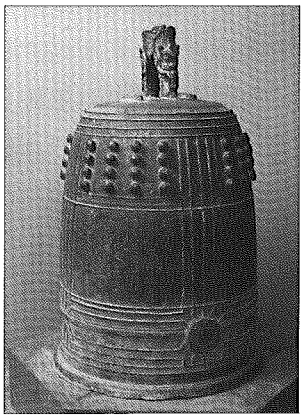
この年の購入資料に「琉球楽童子白馬乗之図」がある。台帳上は沖縄財団からの購入となっているが、購入の契機になったのは東恩納寛惇氏（当時、拓殖大教授）が東京の古書店（骨董屋）で発見したものである。その連絡を受けた博物館が発注して買い受けたものである。東恩納教授は戦前、沖縄郷土博物館に三線「江戸与那」を寄贈されたことでも知られるが、戦後は仲村渠致元作の「魚絵大皿（線彫染付魚文皿）」や田名宗経作の印篭などを惜しみもなく寄贈している人物でもある。同資料は尚典侯が生前愛用した逸品で、その次男尚旦氏が教授に贈ったものである。また、印篭は若狭町の旧家安里家から東恩納家に移された貴重な資料である。楽童子の絵図も、表にはみえないが、東恩納氏のすばやい行動があったればこそ収集できたものである。

1961年3月、外間正幸主事が本土から文化財41点を収集して帰っている。この時には尚典侯の三男尚旦氏から寄贈・譲渡品が15点ある。この中には尚育王の書軸が含まれていた。琉球新報の1961年3月20日付の記事には、尚旦氏の夫人美津子さんの話として「主人が生前から沖縄にかえしたいと気にしていたものですから」とあり、故人の意志であったことがわかる。ただ、当館の台帳には資料の提供者として神山政良氏の名があり、同氏が資料の一部を仲介した可能性がある。

また、鎌倉芳太郎氏からの寄贈・譲渡品が11点ある。円覚寺大雄殿壁画模写と写真、琉球陶磁工芸伝統表、貝摺奉行所絵師筆漆工品下図、安国山樹花木記碑拓本、瓦奉行焼物主取辞令書、大島祝女服装図、同治御冠船御座構図、御冠船図、田名宗経筆画、トキ双紙などがある。このうちのトキ双紙は、鎌倉氏が戦前の来沖中に、中城村熱田の小橋川善安さんの家にあったものを写しとった資料である。

以上、1950年代から60年代初めにかけての、博物館創立初期の文化財の収集状況や背景について補足を試みた。

中山王府の印



旧天尊殿鐘

最後に、収蔵品の中のいくつかを題材として、資料に関する関連情報として記載されるべきであるが、台帳などに一部洩れている貴重な情報を新聞記事から抜粋しておきたい。資料は歴史資料のみに限定した。

『おもろさうし』の紙質について、1965年1月28日の新聞記事には、『おもろさうし』の紙質は芭蕉紙であることが報道されている。鑑定者は島根県出身の安部栄四郎氏（当時62歳）である。同氏は首里山川に残る昔の紙漉き場を訪ねている。首里山川町の紙漉き場は代々喜瀬家が継いでいたようで、分家の喜瀬乗秀さんの話として、芭蕉紙は芭蕉の葉の上に石灰を積んで発酵させてつくったことが紹介されている。安部氏によると、『おもろさうし』の全22巻と『混効験集』2巻は芭蕉紙であるという。

当館所蔵の「中山王府の印」はどこからの寄贈なのか台帳にはみえない。1960年7月7日付の琉球新報で、この印の発見経緯が記されている。この印は奈良県の生駒山麓に住んでいた岡部次郎氏（当時94歳）が所有していたものである。岡部氏は福岡県出身で、戦前は大阪府枚岡市額田町で眼科医として開業していた人である。骨董品として保存していて、戦後は生駒山麓に住むようになり、そこで沖縄出身の上江洲栄信氏（当時73歳）と知り合いになる。上江洲氏の熱意により岡部氏は印の寄贈を考えたという。

また、旧天尊殿鐘は与那城村字平安座27番地の前森カマドさんが兄の前森朝明さん（当時米国に滞在中）から預かっていたものである。この梵鐘は戦時中、米軍が与那城村平安座に持ち込んできたのを前森朝明さんが譲り受けた。一時は部落の時報用に使っていたという。朝明さんが渡米したときに姉のカマドさんに預けてあった。最近、朝明さんから手紙が来て「博物館に寄付するように」と伝言されたことが経緯である。

資料は3件のみを掲げたが、自分自身担当として単に知らなかったこともやや恥ずかしい気もするが、台帳の上で情報の積み上げがないのはこれも問題である。博物館資料の収集はその時点で、旧所蔵者からなるべく多くの情報を得ておく必要があるし、購入の場合でも可能なかぎりは追跡しておくべきだと考える。また、その後の専門家による鑑定などによる見解も蓄積されるべきである。とくに論文などで活字にならない場合はなおさらである。収蔵資料の関連情報をいかに集積していくかは、学芸員が日常業務一環として行うのと平行して、そのシステムなど、さらに今後考えていくべき課題がある。

おわりに

以上、沖縄県立博物館の草創期に関する記録を補完しながら、不完全な形ではあるが備忘録としてまとめてみた。

「50年史」編集を通して博物館のこれまでの流れを学べたことは、私にとって良い機会でした。博物館の変遷だけでも、多くの事柄があり大勢の人々が関っている。博物館は現在の首里大中町（中城御殿）に落ち着くまで数回の移転を重ねてきた。その間には、博物館の名称も何度か変わっている。この変遷だけをとっても、博物館の50年という歴史のおもさを感じることができる。普段なら滅多に聞くことの出来ない諸先輩方の体験談や苦労話、また影ながら博物館を支えてきた人々の思いなど、日頃なかなか表に出にくい人々の話も聞く機会が持てたことは大変興味深いことであった。

この「50年史」編集を振り替えってみると、一言では言い尽くせないほどのものを得たというのが正直な感想である。学芸員を志す者の一人として、50年という節目である記念事業を手伝えたこと大変嬉しく思う。（多良間）

上述のような博物館の草創期に関する記録をまとめながら、博物館で「通常の業務をいかに記録していくか」というのは非常に大切なことであるように思われた。これは博物館としての「情報の共有化」の作業でもある。「情報の共有化」はとくに総合博物館では不可欠なことである。その意味でも今後に課せられた課題は大きいものがある。

博物館職員として資料の収集や保管・保存に関わりながらも、個人的には十分に既述のような情報記載をできていない点を反省してもいる。通常業務に追われながらの仕事で、どれだけ収蔵庫に入って、資料と、向き合いどれだけその整理にいそしむ時間が確保できているか、自問自答する毎日でもある。50年史の編集事業に携わりながら、自己

の博物館人、学芸員としての再認識をさせられた思いである。(萩尾)

最後に、50年史の資料調査などで、お世話になった外間正幸元館長、上間正諭氏、仲本正真氏、佐次田トミさん、石川市歴史民俗資料館の宮里実雄氏などに感謝申し上げます。

【参考文献】

沖縄県教育委員会『沖縄県史料戦後１　沖縄諮詢会記録』１９８６年
沖縄県教育委員会『沖縄県史料戦後２　沖縄民政府記録　１』１９８８年
沖縄県教育委員会『沖縄県史料戦後３　沖縄民政府記録　２』１９９０年
琉球政府文教局編『琉球史料　第１０集　文化編２』１９６４年
那覇市企画部市史編集室『那覇市史　戦後新聞集成１　資料篇　第３巻３』１９７８年
嘉陽安春『沖縄民政府　一つの時代の軌跡』１９８６年
沖縄県立博物館『沖縄県立博物館５０年史』１９９６年
沖縄県立博物館『３０周年記念誌』１９７６年